

# デューク先生へのオマージュ

—人間と自然と日本とアジアを愛して—

Homage to Prof. Benjamin C. Duke  
—Who Loves People, and Nature, and Japan, and Asia—

教育学科教授 中野 照海

## 教授会議長の記録

デューク先生のことを書くのは難しい。ほとんど35年にもなる長い期間と、親しい交際を思うと、ほどよい文章が書ける自信がない。これまでの日常のことばが、あまりにも遠慮のないものだったから、敬語を使ったり、文章を飾ったりすると、気持が適切に表せなくなる。なによりも、よそよそしくなる。それでも、できる限り、第三者的な目で、デュークさんについて語り、教育学科、教育学研究科、教育研究所、さらにはICUへの貢献ばかりでなく、日本とアジアの教育に尽くした働きを記して、久しい間の同僚としての感謝のことばにしたいと思う。

ICUの学則によれば、教授会は学長が議長となることになっている。しかし、教授会では学長の報告が多いなどの理由から、学長の議長としての役割を代行する教授会議長を置いている。そこで、教授会議長は教授会の互選で毎年任命される。デュークさんは、この議長にこれまで9回選ばれている。学長の職務の一部とはいえ、学長の代行を9年間勤めたといってよい。これは未曾有の大記録で、今後も破られることはないと思う。

デューク先生は、大学では、教育学研究科長などの行政職に関わってこられた。どの職にあっても、教授会議長で見せるような、的確な問題の把握と、水際だった議事進行ぶりである。会議での問題の整理と分析と総合、そして、ほど良いユーモアを交える会議の進行ぶりには、いつも感心させられる。こういう能力をもっと大きく生かすために、副学長や学部長などに推薦しよ

うという試みが幾度もあったが、デューク先生は、いつのときも固辞された。ICUの学則では、学長にノンジャパニーズの先生を推すことはできないが、デューク先生の能力と賢さを考えると、学長にも推したい人物である。しかし、また他方では、よしやこれが可能となっても、本人は絶対に受諾しないと思う。

かなり以前のことであるが、永井道雄先生が東京工業大学に勤めておられた時期がある。この大学も面倒な問題を多く抱えていた頃、当時、国立教育会館の館長をされていた高坂正顕先生（元京都大学教授）に、なにかのときに「永井先生が学長をおやりなれば」と話したことがある。高坂先生は、即座に「永井君は有能な人であるが、こういう仕事には向き不向きがあるから」と、暗に可能性の少ないことを言われた。なんでも、行政者の能力と、研究者の能力とは違うというようなことであった。その上、こういう賢い人にはよくある、問題の行き着く先が見え過ぎて、これが行政者としての短所となることもおっしゃった。この観察は、そっくりデューク先生に当てはまる。問題に対する、早見えのところは、まったくその通りである。どうかすると、のちに、東京学芸大学の学長に就任されたカント学者の高坂先生もそうであったかもしれない。

奇しき因縁とでもいうのであろうか。後に、デューク先生が『日本の戦闘的教師たち』と『ジャパニーズ・スクール』の書物を刊行するとき、当時のライシャワ駐日大使の序文とともに、永井道雄先生も文章を寄せておられる。もっと皮肉なことには、永井先生が、三木内閣の文部大臣に就任されたことであろうか。この伝でいけば、デューク先生も教育省の長官になることがあるかもしれない。

#### ティーチング・マシンの紹介者

デューク先生は、ICUに1959年9月にジューン夫人とICUに着任された。以来34年間に及び、ご家族もご夫妻に3人の子どもの、5人家族となった。そして、1996年3月末日をもってご退職になられる。ご就任にな

ったときは、30代半ばであった。後に専門分野を変えることになるが、最初は視聴覚教育担当の専任講師として就任された。学位は、ペンシルヴァニア州立大学で取得されたが、学位論文は教育テレビに関するものである。当時のペンシルヴァニア州立大学は、カーペンター教授、ホーバン教授などの世界的な大物を擁して、1950年代の世界の教育映画研究をリードしていた。この伝統は、後に教育テレビ研究へと移行していく。その頃、デューク先生は教育テレビ研究を進めていたトクルソン教授のもとで学位論文を完成させる。そして、学位取得後、直ぐにICUに赴任のため慌ただしく来日される。それ以来なので、現在のICUのノン・ジャパニーズの先生方の中では、最古参である。初めての未知の国日本の羽田空港に到着の折、当時の学務副学長のトロイヤー先生の手違いから、誰も迎えに行かなかったことは、今でもかっこうの話題になっている。以来、35年に及ぼうという長期となった日本滞在は、ご本人の予想を超えたものであろう。

デューク先生の来日当時、アメリカでは既にプログラム学習やティーチング・マシン運動が盛んになっていた。わが国では、この用語をようやく耳にするといった頃である。1954年以来ICU視聴覚センターが主催して行なっていた夏期の「視聴覚教育研究協議会」の第7回大会で、デューク先生は「ティーチング・マシン」という演題で講演をされている。これは、後に『視聴覚教育研究集録 VII』（1960年）に掲載されるが、この論文はわが国におけるティーチング・マシンに関する、ほとんど最初の紹介である。その後、教育メディア研究の分野では、アメリカの教育省の研究助成による『アジアにおける教育メディア研究に関する調査』（1963年）をまとめている。

### 比較教育の世界へ

書齋での思索を好むデューク先生は、技術革新と絶えず競っているような視聴覚教育や教育工学での研究よりも、教育の思想や原理に興味が向くようになる。哲学や歴史の研究が体質的にも、デュークさんに適合しているようである。最初の研究休暇の機会に、ロンドン大学の教育研究所で比較教育の

研究に専念される。ここでの学位論文が、後に日英両語で出版される「The Japanese Millitant Teachers: A History of Left Wing Teachers' Movement」である。これの日本語訳は『日本の戦闘的教師たち』である。先に述べたように、当時のアメリカ駐日大使であり、日本研究の大先輩でもあるエドウィン・ライシャワ教授がこの著作に序文を寄せられている。ロンドン大学での学位論文の審査には、外部審査教授として、サセックス大学のドーア教授が当たっている。ライシャワ教授やドーア教授と、世界的に著名なジャパノロジストとの交際によって、デューク先生の日本学は、ますます磨きがかかることになる。ロンドン大学への留学のせいかどうか定かでないが、アメリカ人というよりもイギリス的なものへの憧れが身についてくる。以来、コーヒーよりもティーを好むようになる。

イギリスでの学位論文が、その後のデュークさんの仕事の主流となる。これに沿う研究の中で、代表的なものとして、『The Japanese School: Lessons for Industrial America』1986年（『ジャパニーズ・スクール』）、『The Great Educators from Modern Japan』1989年、『Education and Leadership for the Twenty-First Century: Japan, America and Britain』1991年、としてまとめられている。今年度末で、大学の専任の仕事から離れられる主たる理由は、著述に専念されるということである。既に、構想の段階を終えられているものに『Connection of Japanese Education to World』と、『Education and Leadership in Asian Countries』などがある。

### 人間への限りない興味

日本やアジアの教育に関する著述に加えて、定年後の大きなプロジェクトの一つは、Charles Lanman についての物語を書くことであるという。既に、その一部は『Japan Quarterly』に発表されているが、かなりの大作になるとのものと期待されている。これは、単に海外交流に尽くした人物の物語の枠を超えるもののようなのである。ランマンは、明治初期に岩倉使節団がアメリカを訪問した際の通訳に当たった人物である。この人物は、使節団に同行し

た少女の1人である津田梅子の、その後のアメリカ滞在に当って、親代わりをつとめることになる。津田が学業を終えて、日本に帰ってから後も、Lanman 夫人との手紙による交渉が頻繁に続けられる。毎週交換した手紙は膨大な数に上り、これによってわが国の教育とアメリカとの関係が浮かび上がってくるはずである。この著作に期待するところである。

デューク先生のご家族は、ジューン夫人と、ノリコ、キミ、そして、クリストファの5人である。ノリコとキミとは、日本人の両親から生まれたが、生後直ぐに養子として迎えらる。それからしばらく後になって、実子のクリストファが生まれる。デュークさん一家は、こうして、子育ての実験場となる。実験場といっても、別にご夫妻が意識したわけではなく、普通の家庭の様子そのままであった。養子を育てるといった、肩を張る行動は、デュークさんたちには馴染まない。終始、自然体である。まして、国際理解の使命感に燃えてなどといった感懐とは、まったく無縁である。人種を超える養子縁組とはいえ、要するに、人間への関心に駆られたものであった。生後間もなく、日赤産院から迎えた乳児のお尻に青白い蒙古斑を見て、モンゴロイドの印しに感心するといった、人間への尽きない好奇心と関心とを見ることができよう。こういう思いが、ランマン一家と津田梅子との交流への興味に導かれたものと思われる。しかも、こういう興味は、かならずしも人間に限らない。故郷のペンシルヴァニアでの暮らしを思い出すとき、飼っていた猟犬のラブラドル・リトリーバーや、故郷の山の木々の美しさを話すときのデュークさんの顔は輝く。あらゆる生き物への興味が、人間を扱う教育研究へと、自然に繋がってきたのであろう。

現在、ノリコはアメリカ在住の弁護士、キミはアメリカン・スクール(A S I J)の教員、クリスもアメリカン・スクールの教員をしている。ランマン一家と津田梅子との交流を通して、先に挙げた『近代日本の教育の海外との交渉』のテーマは、場面が教育の狭い範囲に限定されるのではなく、国籍や民族を超えた人間について描かれるものと思われる。

生き物への興味は、経団連の英語教師の仕事にも見ることができる。経団

連には、当時の専務理事花村仁八郎氏などが始めた国際研修協会がある。この主な仕事の一つに、英語の学習会がある。毎週木曜日の夕方がレッスンに当てられている。今年で、ここの教師を25年続けたことになる。生徒は、日本を代表する財界人である。ずっと以前のことであるが、私学振興財団の研究会で花村氏に会ったことがある。この研究会を財政的に援助していた経団連の代表として見えていた花村氏が、「デューク先生にどうぞ宜しく」というご丁寧な挨拶があった。デュークさんが、良き英語教師であったことは間違いないが、人間好きのデュークさんにとっては、この英語教室が海千山千の個性的な財界人を観察する絶好の機会だったであろうと想像している。

#### 国際林（インタナショナル・フォレスト）

1988年に始まった「国際林」プロジェクトは、デュークさんの発案による。樹木や植物の自然環境への興味は、少青年時代を過ごした、ペンシルヴァニアの風土と、これへの愛着によるものであろう。大学のキャンパスのマスタープランや、環境保護の委員会への積極的な参加には、こういう背景がうかがえる。「国際林」の最初の植樹は、当時のアメリカ大使、マンズフィールド氏である。樹木は、カリフォルニアセコイヤである。なんでも、100メートルにも育つという、世界最大の樹木となるはずである。国際林には、その後、ソ連の駐日大使などにより、現在では30の異なる国から250本、40種類の樹木が植えられている。これらの樹々は、苗木の状態から成木になるために、間もなく植え変えが始まる。カリフォルニアセコイヤは、他の樹々と比して大きさが違ってくるので、教育研究棟の南側に移されるという。これらの話は、デュークさんのメモなしの話しである。寄贈国名、樹木の種類、本数など、すべてがデュークさんの脳裏に記録されている。

「国際林」は、デュークさんのアイデアが実現したものであるが、これの成長の姿を見届けることは、デュークさんも私もかなわない。しかし、教育研究棟の前庭に聳え立つカリフォルニアセコイヤを想像するだけでも楽し

い。現在のキャンパス内のデュークさんの住宅の庭は、完全に手作りである。東八道路の建設のとき、野川の改修による掘り上げた泥土を、本職のダンプ・トラックの列に並んで、小型トラックで運び、庭のために客土にするという本格的な庭作りであった。だれもが言う、キャンパス内でもっとも美しい庭は、こうして作られた。本人は照れて言わないが、同僚によると、キャンパス内のそこそこに、楓の苗木を折々に植え続けていたという。なんでも、数百本の単位ということである。

### 多芸の人物

先に記したように、デュークさんは大学ではできる限り行政職からは逃がられる限り逃がれていた。それでも数多くの委員会の委員を勤めた。多様な委員会への参画ということでみると、現教員の中では最高であろう。それは、各種委員会期待されている役割を十分に果す能力があつたのである。しかし、本来的には、自分流の暮らしを楽しむことを願い、これを実現した人でも思われる。この意味では、専門にしる、大学の仕事にしる、趣味にしる、家族にしる、自分のスタイルを作り上げている。

お互に若い頃には、教員で野球チームを作って、学生のチームと試合をしていた。デュークさんにも加わらないかと誘った最初るとき、試合当日になって、ファースト・ミットを持って現われた。自分のグラブやバットを持ってくるのは普通であり、キャッチャーミットの持参もそう珍しくはないが、ファースト・ミットは珍しい。なんでも高校のころには、対校チームの選手だったという。ポジションは、当然、一塁手である。音楽でもそうである。どんな楽器だったのか聞いてないが、高校生の頃にはバンドに加わっていたという。当時の仲間の一人は、現在、フィラデルフィア管弦楽団のトランペットの奏者で、トップを吹いている。フィラデルフィア・フィルの来日公演のとき、この友人は、ICUキャンパスまで訪ねて来たという。デュークさんは、ICUに住むようになってから、久しくピアノのレッスンも受けていた。もっぱら、夜中に練習するという。現在も続いていることと思う。リ

サイタルの話は、まだ聞いていない。

### 最高にハンサム

デュークさんについて語る時、考え方や行動がスマートであるばかりでなく、実はアメリカ人のハンサムの典型だそうである。どうなのがアメリカのハンサムなのか、日本人には理解を超える部分もあるが、多くのアメリカ人がそういていた。例えば、デュークさんのICUでの前任だったテイラー教授夫妻も、友人のプロクター&ギャンブルに勤めていたロット夫妻も、彼は very handsome だという。生き方もハンサムであるが、姿もハンサムである。恵まれた人物である。そして、これほど話題には事欠かない人も珍しい。

日本旅館での風呂の使い方や、登別の滝本館での混浴温泉の中で女子高校生の団体に出会ったこと、香港で難民の列に並んで朝食を振舞われたこと、マレーシアのホテルの風呂でギックリ腰になったこと、秋葉原で外人登録証の不携帯で万世橋署で始末書を書かされたこと、その始末書の英文を直して署長に感謝されたことなど、それこそ枚挙に暇がない。これらの物語は、倦むことのない好奇心によるものである。この好奇心が、人々を愛し、動物を愛し、自然を愛し、日本を愛し、アジアを愛することに繋がっていく。最近の関心である「アジアにおける日本」の著作は、まもなく完成であろう。

平成7年度末で、ICUの専任の仕事から離れられるが、当分の間、大学院の学科目の非常勤講師を続けられる。大学の仕事からお退きになるには、能力と体力から見て、まだまだもったいない。退職という、一応の節目に当って、こんな文章を認めたが、デューク先生を「送る」つもりはない。われわれは、まだデュークさんを必要としている。これからも多くの智恵と話題とを、提供し続けて下さることを願っている。

(1995年10月18日記)